

真宗大綱

——行に就いて信を立つ——

曾我量深

一

『教行信証』六卷について、昔から前の五巻と第六巻というものを真実と方便、前五巻は浄土真実の旨を明かし第六巻は浄土方便の意趣を明らかにすると、こういうようなことに多く考えるわけであります。ところで、金子大栄先生は、前四巻と後の二巻とに分けておられる。前四巻は真宗の絶対性、法の絶対性というものを明らかにされた。それから後の二巻、「真仏土」「化身土」の二巻は相対性を明らかにされた。こういうように前四巻と後の二巻とを分けてみる。以前に金子先生の御意見を承っております頃は、前四巻は廻向の巻であるし、後二巻は廻心ということ所述べたと、こういうようにお聞きしておりますけれど、金子先生は御意見を少しまた考えて、新しい考えで解釈しておられるわけであります。

私自身は古くから、何十年も前から、今でも考えは変らぬのでありますけれども、『教行信証』前二巻は伝承、真宗の伝承を明らかにする。我が聖人は「三國の祖師おのこの一宗を興行したもう、ゆえに愚禿勸むるところ更に私なし」というようなことがあるわけです。大体、教行の行という文字が伝承の意義を持っている。行ということ

は、仏教の方の解釈では昔から造作ぞうさ、仏教の発音では「ぞうさ」というのであります。それから、もうひとつの意義は進趣しんしゆ、「すすみおもむく」ということで、造作と進趣との二つの意義を持っている。いずれにしても、行は伝承と
いうことと共通している意義を持つていると思うのであります。それから、行という字は流行るぎよう——流行りやうこうと書いて仏教
では「るぎよう」といいますが——流行という意味をもっているのであります。それで伝承の意味になると思うの
であります。

「行巻」はいろいろの引文がありますが、要するに「正信偈」の前文であると、こういうふう考えてもよからう
と思います。「行巻」にはずっと、『大無量寿経』からして三国七高僧という具合に文類して、その他各宗の祖師が
たの御意見も出ております。そのようにして『大無量寿経』の本願の伝承をお述べになられる。これは「正信偈」の
前文というものでありましょう。そして、最後に聖人は「正信念仏偈」で以て「行巻」を結んでおられます。「正信
偈」は皆さん御承知の通り、初めの半分は大聖の真言、真言とはまことの言葉、大聖とは大いなる聖ひじりということとで釈
尊ということでありましょう。それから「印度西天の論家、中夏日域の高僧、大聖興世の正意を顕わし、如来の本誓
機に應ずることを明かす」という以下「唯可信斯高僧説」というところまでは大祖の解釈げしを述べる。大聖の真言と大
祖の解釈とを述べて「正信偈」というものができあがっておるのであります。「行巻」は要するに「正信偈」が主な
ものでありまして、「正信偈」のための前文という形になっておるのであります。

それに対して、後四巻は「信巻」を主体として、それから「証」と「真仏土」。「証」のなかに還相廻向が入ってお
りますが——我らのさとりは浄土のさとりである。浄土のさとりであるが、信というものが純粹であるか不純である
かと。純粹の信は如来の与えたもう清淨真実の御心、不純粹の信というのは我々衆生の利己的な愛憎違順——我々の
愛憎違順というものは貪欲とか瞋恚です——その愛憎違順の煩惱によって信心が濁ってくる。そういうような信によ
って感ずる浄土は方便化土である。それから、純粹な如来清淨の御心を頂いて、その真実の信心によって感ずる世界

が真実報土というものである。そういうふうに述べられてあるわけであります。とにかく、後四巻というものは己証の巻であるということで、その大体の趣旨を明らかにするのが「信巻」の「別序」というものでありましょう。伝承の巻は「正信偈」で終わり、己証の巻は「信巻」から始まる。それ故に「信巻」には「別序」が置かれてある。まあ、こういうわけであります。

二

天親菩薩の『浄土論』は初めに「願生偈」というものがある。「願生偈」は総説分と名づけております。総説というのはつまり自分の心に純粹に感じたもの、純粹感情、純粹感情というものを以て何の分別もなく、心を空にして「願生偈」というものを述べたのである。されば、親鸞聖人が注意しておられるのは論主の一心でありましょう。一心帰命の一心である。『阿弥陀経』の一心は、普通の我々のいわゆる一心でありましょう。『阿弥陀経』は「名号を執持し、若一日、若二日、若三日、四日、五日、六日、七日、一心にして乱れない」と、一心の上に更に不乱という字をつけているが、これは、我々のいわゆる自力の一心、自利の一心である。親鸞聖人は自利の一心といわれる。親鸞聖人は自力他力ということを、自利他利という言葉で表明しておいでになるわけであります。『教行信証』において自力・他力という言葉を使うべきところを、聖人は自利の一心とか、利他の一心とかというふうに仰せられるのであります。

利他ということは如来にのみある。如来以外のものには利他ということはない。これには、曇鸞大師のいわゆる他利利他の深義というものがある。普通、我々は利他の心をおこすことができるし、利他の行為をなすことができると、こう我々は一般に考えておりますけれども、それは本当に厳肅な意味においては、我々人間には利他ということはないわけであります。利他でないならば何といえ、他利というのである。こういうふうに、利他と他利とい

うことを曇鸞大師が区別した。利他も他利も同じだろうと、普通こういうふうに考えられるけれども、曇鸞大師は仏教の言葉というものを明晰にするために、利他ということと他利ということを区別した。大体、自力他力というような言葉は仏教の言葉でないのでありましょう。仏教の言葉でなくて通俗語なのでしょう。その通俗語を曇鸞大師が、仏教の教えというものを解釈するについて、通俗語を承けて仏教の解釈に用いた。だから、これは大変みな判りやすいことでありましょうけれども、また、いろいろ混乱を起こすことがある。この頃、御承知の通りやめてしまった前の農林大臣が問題を起こした。他力ということは通俗語でありましょう。だから、混乱を起こすことになるでしょう。

他力という言葉が通俗語で、混乱を起こすということは今に始まったことではないのでありまして、これはずっと昔からあるのでありましょうが、これは外の人が間違っているというよりは、内部の人が間違っておったのでしょう。内部の人が間違っておるから、外の人も間違ってくるのは当然のことであって、外の人だけを咎めるわけにはいかぬ。大体が通俗語なのでしょう。通俗語だけれども、しかし、曇鸞大師が通俗語を仏教の教学のなかに移入して——こういうことは大胆なことでありましょう——大胆なことであろうけれども、それによって初めて如来の本願力廻向ということの意義が明らかになる。こういうふうに親鸞聖人は大変感謝している。

仏の本願力という言葉は仏教の言葉でありましょう。天親菩薩は通俗語を用いないで、純粹な言葉だけを用いている。純粹な言葉だけを用いてあるものだから、親鸞聖人は読んでも何かよく判らない。聖人はお判りであるのでしょうけれども、しかし、聖人が判らぬということをおっしゃるのは、これは我らを代表していらっしゃるのだから、それで判らんとおっしゃったのであらうと思ふのであります。そういうわけでありますから、「行巻」には御引文が終わって、それから御引文に続いて要義、かなめ要な事柄を明らかにしてある。まず初めに他力、他力ということ^{かなめ}を明らかにしてある。それから、一、乗海、乗海ということ^{かなめ}を明らかにしてある。他力、他力ということと、一、乗海、乗海ということとの二つの要義を明ら

かにしてある。そこで、他力ということ「他力」とは如来の本願力なり」と親鸞聖人は解釈して、それからずっと『論』『論註』の文を引用して、他力本願の意義を明らかにしてあるわけであります。続いて一乗海、特に一乗の次に海という字をつけて、ただ一乗といわないで一乗海と、本願一乗海という。一乗海の海という字は大変意義が深いもので、海の字の解釈などは大変意義の深い解釈がされておるのである。

三

海の字が使っているものに「如来智慧海」がある。これは東方諸仏国の偈文で、東方諸仏国の偈文は全体としては二十二願の意を述べたものであります。この解釈は偈文の続きに書いてありまして、浄土の菩薩莊嚴のことが詳しく記されてあるわけであります。他方仏土の菩薩が、その国の仏様、師匠である仏様のお勧めというものによって安楽浄土へ往生した。そして、十方世界の他方仏土の諸仏を供養した。そして、供養を終わってまた本国に還ると。これを以て初めの偈文は終わっておる。それから、「若人無善本不得聞此經」（若し人、善本無ければ此の經を聞くことを得ず）というところからして「広度生死流」（広く生死の流れを度すべし）というところまでは別の偈文でありまして、これは「下巻」の終わりのところに本来あったのでしょうか。そこにあったものが、伝えておる間に、後の方の偈文が間違つて前の偈文に続いてきた。そして、一つの偈文のごとくになったのであります。

「若人無善本」以下の偈文は二十願の偈文でしょう。二十願の偈文に違いない。しかし、二十願というものと十七願というものとが何か深い関係を持っているということ……。十七願はいわゆる第十八願の十念念仏というのが、如来廻向の大信心というものに続いて出てくるところの念仏である。こういうのでありますからして、これは純粹の如来廻向の大作です。純粹の如来廻向の大作であるということ明らかにするのが十七願である。十七願は本来十八願のなかにあって一願であったのを、十八願からして分かれてきた。分かれてきたからして十七願というものを立てた

のである。

そして、二十願というのは、これは形は専修念仏である。形は専修念仏であるけれども専修にして雑心なるものである。称える相は余行を雑えず専修である。けれども、その心はいわゆる定散自力の心が雑わっている。こういうふうに「専修雑心」と「化身土巻」におっしゃっている。「真に知んぬ、専修にして雑心なるものは大慶喜心を得ず」。こう悲歎してありまして、その続きのところに三願転入の御文というものが出ておるわけであります。三願転入のことは追ってお話をする機会もあるかと思いますが、いまはお話しいたしません。とにかく、二十願は専修、行としては専修である。専修念仏である。専修念仏であるけれども定散自力の心が雑わっているからして、形は専修であるけれどもその信心の心はいわゆる雑心である。そして、それを自覚しない。普通、二十願の人は二十願であるということに自覚しない。自覚しないけれども何かひとつ心がすっきりしない。すっきりしないものだから、いつもそのために悩みというものを持っておるのであります。

その専修にして雑心なる人の失ということで善導大師の『往生礼讃』には雑修十三の失というものがあげてあります。専修には四つの得をあげ、雑修には十三の失をあげて、特に雑修の失の深きことを知らしめて下さるのであります。雑修十三の失のなかにおいて、初めの九つの失は十九の願に属している失で、いわゆる雑修の失であります。雑行を雑修する。大体、そういうような雑修の失であります。ところが、十三の雑修の失のなかにおいて、第十からして第十三までの四つの失というのは、いまの専修にして雑心なる人の失である。こういうように、聖人は雑修十三の失を前の九失と後の四つの失というものに――善導大師は別段区別しないで雑修十三の失であるとおっしゃった。雑修というても、善導大師のおっしゃるところの普通の雑修、いわゆる雑行を修する人はみな雑修であります。正行を修する人においてもまた雑修ということはあるものであります。そういうことを親鸞聖人は明らかにして「助正ならべて修するをばすなはち雑修となづけたり」と。

雑行と雑修ということは、善導大師の上には多少混乱があるのを親鸞聖人は明瞭にして、雑行と雑修というものを明瞭に区別してあるわけであります。「こころはひとつにあらねども 雑行雑修これにたり 浄土の行にあらぬをばひとへに雑行となづけたり」と。こういうふうに、雑行と雑修というものを、善導大師の上において、あるいは法然上人の上においては多少明瞭を欠いておりますのを、親鸞聖人は雑行と雑修ということをはっきりと区別した。そういうこともあるのであります。また、その雑修、いわゆる雑修だけでなしに、専修のなかにもまた本當の純粹の専修というものもあるし、また、専修であっても不純粹の専修というものもある。その不純粹の専修というものはいわゆる専修雑心というものである。こういうように「化身土巻」において明らかにされた。

専修にして雑心なるもの、二十願のお念仏がつまり専修にして雑心なるものである。その専修にして雑心なるものの失というものが、雑修十三の失のなかの第十から第十三までがそれに当る失である。こういうふうに親鸞聖人は領解なされまして、「化身土巻」に善導大師の雑修十三の失のなかの第十から第十三までの四つの失をあげてあります。これは自分が自覚しない。専修であれば即ち専心だと決めこんでいる。それを親鸞聖人は「専修にして雑心なるもの」と明らかにして下さったのであります。こういうふうに親鸞聖人は二十願というもの、いわゆる真門というものの、詳しくいえば方便真門というものを明らかにされた。要門の根が残っている。その要門の根が残っているのを真門というのであります。

真門のことは善導大師にはそういうお言葉があるし、善導大師は往生についても三往生ということを仰せられる。けれども、法然上人は善導大師の教えの明瞭な点だけをはっきりしておいでになるのであります。三往生などということは、そういうことについては何も上人のお話がない。三往生というようなことは、やはり親鸞聖人の御已証であります。つまり、「信巻」の信心は純粹であります。純粹であれば良いけれども、信心が不純粹であれば、そういう人が感ずる世界はすなわち方便化土というものである。だから、「信巻」というものがずっと「化身土巻」まで――

「化身土巻」だけではありません——「真仏土」「化身土」というものがずっと信からでてきている。こういうわけで「信巻」に「別序」というものが置かれている。「信巻」の「別序」を読むというと、大体どういふことをこれからお話しになるのであるかということがよく判ると思うのである。

四

『教行信証』を見るといふと、「信巻」以後は『浄土論』で申しますならば解義分に当るものである。「行巻」は要するに天親菩薩の『浄土論』についていえば総説分、すなわちいわゆる偈文に当るものである。だから、『教行信証』では偈文というものは「正信偈」だけであります。こういうようにして、大体「教」「行」「二巻」といふのは要するに「正信偈」……。 「正信偈」といふのは名前は「正信偈」だけれども、就行立信といひまして行に就いて信を立てる。「行巻」は行について信を、親鸞聖人の信を述べられたものであります。だから、信といふものは一体どういふものであるか、本当の信とはどういふものであるかといふことは、「信巻」以後でなければ意味は明瞭でないと思うのであります。

本願の三信さんしん、大体、本願の三信なんていう名前はないと思います。三心さんしんといふもの、三つの心は『観経』の三心であります。『観経』の三心と申しますのは、これは『観経』の「仏、阿難及び韋提希に告げたまわく。それ衆生あつて浄土を願生するものは必ず三心を具せ。何らをか三とするや。一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向発願心。この三心を具せば即すなわち往生する」。こういうふう述べてあるのであります。それを善導大師は一心を欠くならば往生しないと書いています。三心を具足すれば往生すると經文に書いてあるのを、更に善導大師は解釈して言葉を加えて、一心を欠くれば往生しないと、こういうように善導大師は述べている。親鸞聖人は、一心といふのはすなわち天親菩薩の一心帰命の一心である。一心帰命の一心であつて、この一心といふのは至心信樂の信樂である。こうい

うように親鸞聖人は見て、一心を欠くときは、すなわち信心を欠くならば三心を具足しない。信心というものを欠くならば至心も欲生も全く成立せんのである。こういうように述べて、『観経』の三心というものを以て本願の至心・信楽・欲生我国を照らしてみようと、本願の至心・信楽・欲生もまた三心ということが出来る。こういうふうにして、この「信巻」には三心、三つの心という。一つには至心・二つには信楽・三つには欲生というように、至心・信楽・欲生を本願の三心として、そして『観経』の一至至心・二者深信・三者廻向発願心という『観経』三心の隠彰の意義を明かすものであると、『教行信証』に御解釈なされてあるわけであります。

本願の三信ということとは親鸞聖人が初めて仰せられたものとみえる。それから、信楽なんていうことでも、『成唯識論』を読みますというと善の心所……。心の王と心所有の法、心王と心所というふうに分けて、そして、五十一の心所というものをならべておきまして、心王がひとりはたらくのではなくして、心所というものと一緒になつて互に相応して動いているのであるということ述べているのであります。そのなかで、善の心所というもののなかに信がある。その信というものを解釈するなかに信楽というものがあります。至心信楽の信楽でございます。ここで信というものを解釈しておるのであります、信は澄清（じやうせい）を義となす。澄（じやう）という字は「すむ」という字であります。清という字は清浄の清の字であります。信とはそれ自体澄んでまた清い。信は澄清をその性とするのである。そして、澄清の信というものがおこるといふと、それと相応するところ、心王全部を澄清ならしめるものであると解釈しております。浄土宗などはいまの『成唯識論』を採用して信という字を解釈しているのであります。しかし、『教行信証』は『成唯識論』を用いておりません。こういうところが浄土宗と浄土真宗との違いであります。

五

信は疑蓋無雑である。如来の真実に対して一切の疑蓋無雑、疑いの心が少しも雑わらない。そういうことを信楽と

いうのである。だから、信樂を一心という。一心の一は疑蓋無雜の意義を一というのであると解釈してある。だから、天親菩薩の一心帰命の一心と、『阿弥陀經』の一心不乱の一心というものは違うわけであります。『阿弥陀經』の一心不乱は普通の心の澄清、信は澄清を義となすという意味の一心でありまして、疑蓋無雜という解釈ではないと思うのであります。それで、三心一心の字訓釈というものがありまして、字訓をあげて一心の意義を明らかにして、愚鈍の衆生を解了しやすからしめんがために天親菩薩は一心と領解されたのである。そうして、一心と本願成就の文の聞其名号信心歡喜乃至一念、一心と一念ということは同じ意義を持つのである。

こういうようにして、天親菩薩の「願生偈」というものを以て『大無量壽經』を照らしていく。『大無量壽經』のなかに『大無量壽經』全体を見ていく。『大無量壽經』のなかに『大無量壽經』を照らすところの眼がどこにあるかと、こういうことを親鸞聖人は明らかにしておいでになるのであります。つまり、天親菩薩の『淨土論』を以て、『淨土論』の「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」という天親菩薩が御自身の領解を述べられました「願生偈」を以て『大無量壽經』を照らしていくというと、『大無量壽經』の本願成就文というものと、天親菩薩の「願生偈」の初めの四句というものと互いに照応しているのである。そういうことが明らかにする。だから、『大無量壽經』のなかに『大無量壽經』全部を照らし出すところの一つの眼、『大無量壽經』のなかに『大無量壽經』を見る眼、そういう眼にあたるものが本願成就の文である。そういうことを親鸞聖人が「信巻」において明らかにされたのであります。そういう立場から本願成就文というものに新しい訓点をつけて、そうして成就文の意義を明瞭にせられたのであります。天親菩薩の「願生偈」によって本願成就の文というものの意義を明らかにされた。これが「信巻」に明らかにできるところであると思うのであります。

法然上人は正明往生淨土の經論と、それから傍明往生淨土の經論といいますが、そういうものを『選択本願念仏集』『教相章』に明らかにしている。そして、この正明往生淨土の經と論というものを明らかにしていわゆる三經一

論というものが、正依のお経は三経だけれども、正依の経の眼を、経の眼目といいますか、そういうものを照らし出しているものが天親菩薩の『往生浄土論』である。特に『往生浄土論』の「願生偈」というものであるということを明らかにせんがために、南無阿弥陀仏の称名の行からして更に信というものを開顯された。既に「正信偈」は「行巻」のなかにあるわけだからして、「行巻」に既に念仏を信ずる信というものはあるわけであります。けれども、それだけでは如来廻向の大信心ということが明らかにすると思うのであります。たとえば、三願転入ということも如来廻向の大信心ということを明らかにするというのが大切なのでありましょう。だから、如来廻向の大信心であるということを明らかにいたしまして、そして、この信というものが、単に自分一人だけ救われたというところにとどまらないで、その信というものが自信教人信という広大な不思議なはたらき、妙用を持っているのであります。

たとえば、我々がお念仏を称える。私どもが称える念仏というものが、念仏を称えるというだけの念仏であるならば、その念仏は能行というものでありましょう。能行がただ能行にとどまっておるのでありましょうけれども、しかし、我々の称える念仏は諸仏の教えの念仏の廻向である。だからして、我々の称える念仏が諸仏の念仏というものになって、つまり教行のなかにおさまる。だから、浄土の教えというものは、たとえ一人でも教えを信ずる信者というものがおるならば教えは生きておる。教えは死なないのである。そういうことがある。

六

我々が称える念仏を一応能行としても良い。けれども、その能行が能行にとどまらない。能行が能行だけにとどまったならば、その能行はその人が生きていうちは行が生きていうけれども、その人が死んだら行は終わってしまう。また、その人が何か狂乱でもしたら行に狂いがある。けれども、その人の能行が能行にとどまらないで、能行を所行にかえていく。所行が能行に廻向されて能行というものになったのであるからして、また、能行がおのずから所行に

かえってくる。こちらから廻向しなくとも、能行が自然法爾に所行となる。こういうふうにして、行者の称うる念仏と諸仏の教えの念仏というものは、これは諸仏の教えが我らを救うて、そして我らをして念仏せしめるのでありましょう。そうすれば、その念仏というのは我らのところにとどまらずして、それがそのまま教えになる。こういうことを明らかにするために存覚の『六要鈔』におきましては「行は所行の法」と、こういつている。

行は我々が称えているのであるから、一応能行というても良いのであろう。一応、能行というても良いのでしよう。けれども、能行が能行にとどまらない。能行が能行にとどまらずして所行にかえる。諸仏の教えのもとにかえる。だからして、諸仏の教えというのは、ただそういうことが別にあるのではないのでありまして、我々に信心を与える。我々の心に信というものが開けるならば、その信がおのずから行というものになって、行というものが我々にあらわれてくる。我々が頂戴した能行が能行にとどまらずして、能行がそのまま所行となる。だからして、所行が廻向されて能行として我々を救うたのでありますから、救われた私どもが称える念仏はまた他の一切の衆生を救うところの所行の法となる。

能行と所行とは一つのものである。そういう関係を持つておるところに念仏の尊い意義がある。こういうことを述べているのが「行巻」でございます。「大行というは則ち無碍光如来の名を称するなり。斯の行は即ち是れ諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり、極速円満す、真如一実の功德宝海なり。故に大行と名く」。こういう御解釈があるわけでありす。

一般に、信というものは就行立信でありますから、お念仏があればお念仏によって我らはそこに信を獲る。お念仏によって信を獲ることがあるわけです。つまり、親鸞聖人は法然上人の教えによって真実の信心を獲たと、それで以て間違いないと思うのであります。親鸞聖人は法然上人の教えをうけて真実信心を獲たということを、年をあげて『教行信証』『後序』の文のところに、自分は法然上人にお会いした。その時に自分は雑行を棄てて本願に帰し

た。こう記されてありますが、その行というものが本当に自分の身の上にとどのようにはたらくているかということ、それを明らかにするために親鸞聖人は更に御己証の巻でありますところの「信巻」を開いた。「信巻」を開けば自然に「証巻」「真仏土巻」「化身土巻」というものが、ぱっと自然に開展していくわけであると思うのであります。

（本稿は、昭和四十三年四月十八日、大谷大学大学院における講義の筆録である。文責 杉浦慧敬）

衆生の誕生

それ永劫の菩薩の修行は正に是れ至心信樂欲生の三心成就の歴史であります。是れ正に十方衆生を招喚する勅命を成就する過程であります。衆生を招喚すると云うことは常識的には機を招く所の法の力であるが如くであるが、それは根本的に間違っている。衆生を招喚するとは正に機を成就建立する所の法の力用である。如来未だ喚ばざるに先立って衆生があるのではない。若しかかる衆生があるならばそれは真実の衆生ではないのである。我々は真実に深く内省するの要がある。如来本願招喚の勅命こそは衆生の体である。我々は如来の招喚に依って誕生した。如来の招喚なき所に唯一人の真実何の衆生もないのである。されば先づ衆生があつて、後に如来がそれを招喚し給ふのではなく、如来の招喚の声の成就する所に、同時即時に十方衆生の機根が生れるのである。

（曾我晝深著『救済と自証』より）